

(株)シーズ金太郎 代表取締役社長

谷口弘之さん

「一粒の種を蒔(ま)き、それを育て、未来を切り開く」がわが社のモットーだ。種は、作物を育てるすべての始まり。良質の物を届けたい」と、京丹後市久美浜町金谷の(株)シーズ金太郎代表取締役社長、谷口弘之さん(63)が話す。

同社は、2015年4月に金谷集落の農家31人が株主となって設立した。社名は、採種事業を柱に据えていることから、英語の「シーズ(種)」と集落名から「I文字を取った「金太郎」を合わせて名付けた。一度で覚えてもらい、金太郎のように集落を元気にする願いを込めた。

同集落は、兵庫県と隣接する市南西部に位置する中山間地で、丹

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

後地域の最高峰、高竜寺ヶ岳の北に約20畝の農地が広がる。採種事業は、大正時代に京都市内の大手種苗会社の創業者が「この地の気候は、野菜の種作りに適している」と始めて以来の歴史を持つ。しかし、同集落でも高齢化による担い手不足が進行。地域農業を維持していくために、約10年前から法人化を集落ぐるみで話し合ってきたが、まとまらずにいた。

谷口さんは「金谷の中心的な担い手が60歳前後になってきた。法人を立ち上げて雇用で後継者を育てるラストチャンスになると焦っていた時、J A京都の地元支店長を務めていた山口義雄さん(61)が定年退職し、13年に仲間に加わってくれたのが大きかった」と話す。

山口さんは、地域の合意を取り付けるために精力的に活動。J A



▶採種する「甘藍」を手にする谷口さん

種子生産の伝統守る

のバックアップを受け、2年間で法人設立にこぎ着けた。谷口さんが代表取締役社長に、山口さんは専務取締役に就任した。

現在は、ハウス12棟(41畝)で「甘藍(かんらん)」「キャベツの一種」の採種と、水稻の基幹作業受託約15畝が経営の柱。これだけの規模にもかかわらず、農機は所有せず、全て金谷営農組合や役員所有の物を借り受けていることも経営の特徴だ。

谷口さんは「会社を立ち上げて1年が経過し、集落の皆さんや取引先の信頼が徐々に得られていることを実感している。経営規模はまだまだ小さいが、一粒の種が大きな果実を結ぶように、若い人を受け入れ、育て、独立してもらえるよう、担い手の種作りにも頑張っていきたい」と話す。

.....

■法人所在地 京丹後市久美浜町金谷387。連絡先は山口専務、(電)090(1899)9976。

■法人概要 2015年4月設立。代表取締役1人、専務取締役1人、取締役3人、監査役1人、パートタイマー2人(繁忙期4人)。甘藍の採種41畝(ハウス12棟)、水稻作業受託約15畝。